

## はじめに

21世紀が始まって8年が経過した今日、20世紀の後半から、生命科学、人間科学が急速に前進したのには、それなりの理由があると考えられるべきであろう。医学や看護学などはこの30年の間に、極めて大きな学問体系として進化してきた。と同時に、人間は、新たな課題を自ら作り出してしまった。こうした状況の中で、社会における人間の様々な課題に立ち向かっていくにあたり、保健・医療・福祉分野のこれまでの蓄積を問い直す必要に迫られていると感じる人は少なくないのではないだろうか。

困っている人、助けを求めている人を支援する、援助するというのは人間固有のプリミティブな行為である。にもかかわらず、現代は、その行為のあり方、その意味が問い直される時代である。遺伝子レベルでの医学的診断が可能になるとともに、社会的な価値に基づき個人に介入することが無条件に肯定されることはなくなった。生命倫理に関する深い知識や、人間に関する理解なくしては、適切な援助、支援が成立しない時代であるともいえよう。

自己決定、エンパワメント、アサーティブネス、ホリスティック、スピリチュアル、社会的包摂など様々なキーワードが語られつつ、言説のエントロピーが増大し、混乱は混沌へと向かっているかのようである。

そうした中で、ヒューマンサービスあるいはヒューマンサービスーズという極めてシンプルな言葉がある。この言葉を用いて、アメリカでは1970年前後から今日に至るまで、人を援助する、支援するという枠組みの中で価値ある取り組みが営まれてきた。

本書は、Human Services — Contemporary Issues and Trends — (第3版)の抄訳である。これは、日本にはなじみの薄いヒューマンサービスという分野がアメリカでどのような経緯で成立し、現在、アメリカ社会の中でどのような役割を担っているかを理解する上で大変重要なものである。

ここで語られている問題のいくつかは、日本でも次第に大きな社会的課題になろうとしている。そうした課題にアプローチしていく上での参考にしていただくとともに、現在の日本の社会状況の上に保健・医療・福祉を始めとする対人援助全体の新たな方向性を考える際に、ここで述べられていることは大きな手がかりになるものであろう。

この本に触れたことをきっかけとして、ヒューマンサービスという言葉を手掛かりに、保健・医療・福祉を始めとした対人援助サービスのベーシックな議論が、多くの方々によって深まっていくことを期待する。

平成21年7月20日

山崎美貴子  
臼井正樹